





友 林 蘇 岐

九州の吉野より

天の活火山として有名なる阿蘇山を距る事北に五里こ、そ「百年の計は樹植ゆるにあ」と自覚したる郷民の爲に今や隣者たる大森林と化し「九州の吉野」を以て自他共に許す熊本縣は阿蘇郡南北小國の兩村なり植樹造林見込面積約六千町歩を算し造林經營の成績は特に優秀の状態を呈するのみならず殊に最近材價の好況に伴ひ製材所

| 樹種  | 見込面積 | 標準換算一段歩當 |           | 材積      | 林齡 | 連年生長量   | 平均標準 |
|-----|------|----------|-----------|---------|----|---------|------|
|     |      | 目通回      | 平均現在伐採長木數 |         |    |         |      |
| スギ  | 七段歩  | 自一、四〇〇   | 二〇〇       | 三、八、六〇〇 | 二〇 | 二、二〇    | 二、二〇 |
| ヒノキ | 八段歩  | 自一、六〇〇   | 一〇〇       | 一、七、五〇〇 | 二〇 | 一、八、三九〇 | 二、二〇 |

備考  
本調査ハ各林ニ於テ標準地一畝歩宛ヲ選測シ毎木調査ヲ以テ調査シタルモノナリ

由來本地方は地形地質に於て林業に適良なる天恵を有するも雖も今日の如く好成績を擧ぐるに至りたるは偏に當業者の熱心盡瘁の賜なるに他ならざるは何人も疑はざるどころなり今之が植樹造林勃興の由來を小國林業事績より摘録し紹介せんか  
明治十五六年頃に至りて主要林木温伐の極點に達し森林の頹廢を招きたるは實に遺憾の事なりしも一面に於ては是れが爲急遽小國郷の殷賑を來し經濟上の濶澤を興ふるに及び茲に始めて藩政時代林制の嚴督を御山支配役及篤志者の努力の賜なるを得し山林の利益を味ひ造林の必要を感ずるもの

あるに至る之れ則ち小國林業勃興の一大動機となり郷民一般の至覺を誘發するの所因なりとす此の時代よりして造林思想次第に萌芽し挿種法により伐採跡地の造林を行ふもの踵を接して輩出するに至りたりと雖も其の法方にいたりては殆んど智識無く頗る幼稚なるのみならず之れに充つべき枝穂を得んと欲するも母樹勢なくして容易に得る能はず随つて造林の實行は頗る困難を極め運々として進まず況んや一定の標準も無く各人區々にして拙劣疎放なる事言ふに堪へざるものなりしなり凡そ事業は如何に有益なる事柄と雖も其の經營方法の宜敷を

友 林 蘇 岐

荒蕪地等一切伐採整理して植栽を行ひつ、ありしが時に明治廿四年東京に内國勸業博覽會の開催あり小國郷より參會したるもの歸郷して其の見聞を造林法の不完全なるを感し新造林法を研究せんと念動興然として禁する能はず先進地の視察を思ひ立ち北小國村字上田の北里榮喜氏が當時大阪にあるを訪問し相携りて奈良縣吉野郡川上村に赴き同地の林況を視察し杉檜林の美且且事業の盛大なるに驚歎し留ること一週間幾多の研究見學を遂げたるは正に明治廿五年初秋の候なり橋本氏は歸郷の後苗圃を設置して吉野杉檜子を播下し苗木を養成して明治廿七年之を山地に移植したるは將に之れ小國郷に吉野杉檜を植栽したるの嚆矢にして爾來小國の造林事業が吉野式を模倣し改良發達して現今の盛況を呈するに至りたるは實に此時に於て其の起原を爲せるものなりとす同じく視察したる北里氏は當時大阪に止まり一兩年間郷にあらざりしが故に時々往來して自家の造林に努むるの外専ら造林事業に従ふ能はず爲めに此間に於ける郷中林業開發の中心は一に橋本氏一身に懸り氏は全力を盡して自ら造林を實行すると共に郷民に新造林法を勸誘し或は杉檜種子を無代價にて分與し或は自家養成の苗圃を各方面に寄贈分配し或は苗圃を實見せしめ又有志者に吉野林況の視察を勸誘し同伴して相共に吉野に林業を見學研究する等爲めに同地に出遊する事前七回に及べりと云ふ

以て同氏が斯業に對する先覺研究と郷中指導開發の熱誠熾烈なりし一斑を窺ひ知るに足らん然れども凡そ事業の改良を行ふに當りては障礙の之れに伴ふは世の通弊なり橋本氏が熱心新造林法を鼓吹し植林の普及を唱導するに當りて之に反對する輩又尠なからず曰く小國には由來挿種法により立派なる發達をなしつ、あり何を苦しんで他方の樹穂を移し法を施すの要あらんや曰く植林増殖せば爲めに放牧等の自由を抑制し田畑の肥料及牛馬の飼料を得るに苦しむ曰く小國は積雪多き爲め杉野杉は柔弱にして挫折し又は撓倒し枯死し易し曰く吉野杉は成長速かなるも在來の小國杉よりも材質劣惡なり曰く保護上手數を要し又苗木養成の手數と費用を多く要す曰く天然林を伐採して悉く新林に改めんとするは經濟上迂且なりと其の他各種の批評を爲し造林業發達の前途を遮らんとするもの枚擧に遑あらず如此反對思想を有するもの尠からざる状況なるを以て橋本氏が新造林法實行の期に當りては折角造林したりと喜ぶ間も無く何人とも知れず放火して燒燼せられ或は周圍に柵圍を施せや代を破壊し夜間多數の牛馬を放牧して蹂躪せしめ朝早くひき去る事絶間無く之が爲め一時は造林事業成功の如何を疑ふ事屢々にして爲めに同氏は郷社兩神社に詣で、若し功ならずんば生命を斷ち給へとて成功を祈願したる事ありと云へり氏が敢爲勇邁の氣は此困難に遭遇して益々其決心を

得ざれば有益の事業となる能はず况んや造林の如き長年月を期して最良の收益を獲んとするものありては其の事業の初期に於ける方法の良否と連年管理上の注意如何とに最終の目的に於て年數の長短に比例して非常の等差を見るべきは理の然らしむる所とすされば之が適當なる先進の指導者に斯業熱心家の出づると否とは其の地方其の事業の上にも多大なる影響を興ふるものたるや喋々を俟たざるなり由來の小國郷は幾多の名族あり御山支配役若くは山の口役等を勤めたる先輩等ありて地方の開發に努力しつゝありと雖も造林方法に至りては依然として舊來の挿種法を行ひ且つ小規模のものたるに過ぎざりしが茲に南小國村大字亦馬場に橋本武太郎なる人一寶曆年間御山支配役たりし橋本仁兵衛氏より七代目、明治十七年四月偶々自家山林にて立木を誤伐し其の嚴父の譴責訓戒を受け始めて森林愛護の念を起し誤伐の辨償として自ら杉苗を植付けん事を嚴父に誓ひ同十八年四月始めて植栽に着手し同年六月大日本山林會に加盟し大いに心を植樹造林に傾け將來林業の發達を計らんと決心せり然るに同廿一年嚴父は遠逝し同居の叔父相續し病歿し一家の事細大共に一身に主宰するの止むなきに至りて殆んど寸暇を得ず僅かに農隙を利用して造林を計るに過ぎざりしが斯くでは植樹發展の素志を實行し難きを感し斷然農業を捨て、造林に没頭し其所有の雜木林及原野并に

堅ふし各自を訪問して山林の加害に關する注意を懇請し晨に星を頂いて山林に入り夕べは月光を浴びて家に歸るを常とす如斯刻苦精勵するの動靜は時に餘人をして聊か狂氣せしめしめたりと疑はしめたる事尠ならず果せる哉事業に熱中して睡眠をどるの時間僅かに四時間を出でず心身過勞の結果遂に神經衰弱に陥り以來病羸の人となる事七年此間雖も死して止むの決心を以て病を押して造林事業を廢せず且有志者と相議して山林會を創設し之が發展に努め其苦心慘澹の情又筆紙に盡し難きもの多し如斯なるを以て造林の成績は漸次良果を實現し爲めに衆目の注視するところとなり此事業を贊同し見習して實地に之を行ふもの日に月に増加し遂には各競争の状態を呈し進歩の功程頗る著しくして林害の如きは各自相戒めて侵すものなく斯くて在來の造林法も新造林法と共に改善發達して小國の天地を新ならしめ遠近其の盛況を傳へ聞き來訪視察するもの續々として絶へず小國林業の名聲漸く高く全く林況の一變化を來し一種の特長を有するに至れり之れ他なし橋本氏の如き熱烈なる先覺指導者顯はれ北里榮喜、松崎茂、佐藤喜足、加藤逸喜、室原基太郎の五氏相次りて起ち山林會を組織し共に郷中の中心となりて自ら實行し且指導誘掖したるにより今日の盛況を呈するに至りたるものにして之が爲め各種の事業發展と風教の上

友 林 蘇 岐

す之、要するに小國在來の杉檜造林と吉野杉檜造林とに付ては、各特性を有し、一長一短あるを免れず尙研究の余地を存し、一概に得失を論断する能はじと雖も、林業發達の過渡時代にありては、些末の研究を積むの邊無く、只當時最善とする自信の針路に向つて勇往邁進するの外なく之に依り始めて進歩發達を來したるものと云ふべし、今や小國郷の私有林野は勿論荒蕪に屬する耕地の如きも悉く杉檜を造林し殆んど餘地を存せざる迄に達し、現今は竹林の改良及新炭及椎茸の原料たる櫟の増殖を計り杉檜林は手入及間伐の勵行并に利用に向つて更に一步を進めつゝあり、一般に林業上の智識は著しく普及登達の域に達し、些細の點に至る迄研鑽講究するの餘力を生じ、茲に一種の小國式森林經營の一紀元を對し得たるものなりとす。

余は公務の序を以て數回本郷林業の一般を視察しかつて、學窓時代視察したる吉野の林相に髣髴たるを憶ひ思はず其の林相の美に打たれて「嗚呼九州の吉野」なる讚辭を惜しまざりき。

且つ本郷林業開發の起原者橋本武次郎氏にも一夕親しく面接林業經營上の苦心に付有益なる物語りを拜聴せり、後日稿改めて筆をとらん。

尙氏は熊本縣林業界の長老として其功績を表彰さる、事數回に及び、一昨年昨年の大日本山林會に際しては總裁宮殿下より拜謁の榮を賜はり其功勞を嘉賞せられたり完

嚴冬に入らんとする  
北海道冬季生活珍談

吉田正男

同、北北海道でも小樽國館の海岸地方と北見十勝在狩地方の高原とは其の寒冷の度東京と伊州諏訪湖木曾附近の相違はあると言ふ雪の北海道語として傳へられて居るのは、多きは南の海岸地方だけの事、未だ海抜千尺以上の石狩山地方の事などは知れ渡り居ない様である、左様した高原地方には内地人は余り住居して居ないで、土人アイヌが特種部落を造り居る、其處山深い寒村に出稼した内地人から頗る耳新らしい話しを聞及、だので御紹介致しませう、五月梅が咲き六月に櫻が咲く高原では麗かな太陽の顔は夏季を除いて滅多に拜めるものではない、胡沙吹く風はアザラシ泳ぐ北水洋を吹送つて來るだけに針の様に痛い空は暗雲低廻して鬱陶しいこと御話にならぬ、十月から四月迄一年の三分の二期間は見渡限り野も山も河も田畑も家も森林も雪に蔽はれて雪の下から森が出たり家が出たり甚だしきは人家の屋根の上を櫓が人や貨物を運搬して居ると云ふ小便凍り糞便氷る位な事は夥多にありがちな事で小便が棒見たいに衝立て銀色に光り糞が金色の佛像見たいに金に光る呼吸が凍つて霜柱が立ち鼻水が凍つて鐘乳石の様に堅い氷柱となつてぶらぶらがるこれは僕がつけたのだがそれでも寒風凜烈な夜明前の

氣に有ては有り得可事、敢て不思議は存じないが左様なると入間も生きて居らぬ、でゴロ、凍死者が北海道至る所に出る、な物だ外氣凜然なのに引換て室内は防塞設備の行届いて居るので其の割に寒くはない家の前には防風林を植込み、雨戸の前には厚な板を立懸けて置て雪の重量の直接に加重するを避ける、雨戸の隙間や裂目には泥を塗り布を詰めたり、雨戸以外の戸は悉く板を以て蔽ふ、從て日の光は到底拜れるものではないから冬中かんでらの附放して土間の土を深く掘り、それに焚火をボン、燃す中には家中に土の温室を拵へて何のことはない、原始時代の穴居生活だと言て居た、これは風通りの好い内地人の冬籠り生活よりも餘程暖い勘定である、併し之れも火の氣が絶えない間だけのもの、寝てしまふやうになつては道がに寒い土人のアイヌは勿論日本人でもこの地方では吾々が寝る様に手足を延した姿勢では逆も寒くて安眠が出来ず、猫背になつて足を縮め手を股倉の中に衝込んで圓くなつて寝ると云ふこれが妙齡な女であつては頗る艶消しで焚火に燻された黒い顔をして縮つて寝る風態を見ては百年の戀も褪めるやうに見てもないが自然の要求で致し方はないと云ふ初めてこの男が此の地方で冬籠り生活をして驚いたのは夜中にビンビンと音響を聞くことであつたと云ふは、是できて氣味の悪い化物屋敷見たいな所だ、な、良く氣を付けて見て居ると鍋釜から音

友 林 蘇 岐

が聞こえたり徳利から發したり醬油瓶から出たり甚だしきは蜜柑からでも聞こゆるなると氣味の悪い屋敷だと翌朝聞て見るとそれは皆水の雫が氷る音ださうで酒も醬油も每晚氷るので温めてからでない用は達せない、固体に成つた物は立派で粉砕し鐵鍋で煎じてからやつと飲める模にする蜜柑は焼て眞黒にしてから嚙ると云ふから變つて居るではありませんか卵を氷らしては固ると云て暖爐の邊に置て寝たら翌朝に茹でて居たと冬ふ話もある僕が札幌に居てさ、香油が氷り附て頭に付ける事も出來ず役所へ走る様な事もある、時には電車が氷り付て一晩中町の真中にある事も冬中に三四回位は見當る事である、まだ、奥山の方に行つて居れば随分冬中の珍談もある事でしよう

終り

岐蘇林友とメス

S W 生

嶽の雪を背にして庭の落葉を掃く、規則正しく印された箒目にヒソヒソと晩秋の淋しさが囁やく、机に寄ると墨を這ふて來る冷氣が殊更の様に感じられる。

今此處に題して「岐蘇林友とメス」と云ふ岐蘇林友——何と云ふ滋味のある名稱でせう、メス何といふ冷き淋しき響でせう。

岐蘇林友其ものは吾等所謂懐しい母校の

象徴である、紙数は十二頁活字數二萬、十九文字詰二十行原稿五十三枚、甚だ潜越な話であるが若し是より貧弱なものが他に存在を認むるとすれば、其内容も豊富な體にも完備した雑誌と云ふべきである、聞くに冷い此メスは數年來殆ど使用せず空虚な頭腦の一隅に放り出されてあつたもので或國のドクトルの持つて居るもの、様に鋭い切味は持つて居ない。

然しながら一度其處に觸り、時は少々位の疼痛は關はずに切らずに止まない云ふのが之の特質である。

山が聳つて水が清い、其谷間の鬱蒼の中に吾等が僅か一本の樹木を伐採する時、吾等は常に何時でも何處でも如何様にして伐採し、如何様に造材し、如何様にした搬出するかを考察することを忘れない、其處には何時も吾等の最善の努力が伴ふ、從つて吾等は其處に尊き經驗を得——其れが假に失敗に終つても——犯され難き自覺を強く抱持する、斯くして吾等は比較的底なき人となる、吾等は何事にも此考察を置き忘れなくてはならない、即ち之が不斷の努力の伴ふ研究心であつて、侵し難い崇峻さを持つて居る。

今此處に校友雜誌を手にした時でも此意味に於て、自分は其圈内から脱せない限りは「林友を如何にすべきか」は常に考察するの必要はなからうか、そうして全部の校友が林友の親切なる編者であり母校の着實

なる讚美者であらねばならない

岐蘇林友を如何にすべきか斯した問題は私が未だそぼ降る春雨の日寮舎の窓に遠く故郷を想つたり、ユスモス咲く母校の庭に佇んで自分の騙る世界を畫いたりした頃、屢々吾等の敬すべき先輩によつて、熱心に且つ眞剣に論議され甚く心強さを感した、其云ふべき點は其等の人々によつて既に云ひ盡され、今更其れを繰返す必要を認めないかも知れない、然し吾が理想が時間の推移と共に移り變り、吾が生活の氣位に支配されるものとする以上は多少の其處に差異を認めなければならぬ、從つて之に伴ふ不斷の努力、「如何にすべきか」の問題は永久に滅亡することを知らない、且つ其れが絶体的理想に沿ふべきものとしても常に其圍線を離れざらん事に最善の注意を必要とする、此意味に於て此處に再び「岐蘇林友を如何にすべきか」——編輯、發行、其他凡てに就て——を繰返すも強ち其物全部が無意味に歸する譯でもあるまい。

母校を離れた吾が林友は巢立つ、燕の様に無限の喜悅と幸福に抱擁されて、其或ものは山を越へ或ものは海を渡つて親切なる幾百かの校友の手に入る、雜誌部員及其顧問なる人、其他數多の校友の努力によつて組まれた活字には、實に押へ難い味を覺えしめる、其れは吾等と同じ生活に生きて行く傍の人々に對して少からぬ誇りの、又彼等が唯一の羨望の的である。

是は林友編者の期待でもあり、且吾等の希望でもあり、しかし其幾分かは此期待を裏切り、此希望を實現せぬ場合が尠くなくないのを遺憾に思はざるを得ない。林友雜誌が校友の手によつて開封せられる其瞬間迄は懐かしきものよ汝の名は岐蘇林友なりの押へ難い氣分を以て充たされる、其れに次いで起るべきは失望である落膽である、其れ等の人々の顔には期待を裏切られた淋しみがアリアリと浮ぶ、最後にはフアンと云ふた様な冷笑と共に傍の紙屑籠に放り込まれる。

斯うした時にありし昔の岐蘇林友編者——極めて貧弱な頭腦の持主ではなかつたが——と云ふ途を経て來た自分に取つては、嫌と云ふ程自分の頬でも打擲された様な侮辱さを感じしめる、之は私の周圍に限つた事かも知れないが其れにしても甚だ残念なことである。

未了

菊池先生を送る

Y 生

菊池先生もどう／＼木曾を去られて水戸の高等學校に御榮轉になつてしまつた。十月號の林友を見て「どう／＼先生の世に出る時が來たな」と思つた、實際先生は失禮だが勤育の任にある中等教員としてよりも自然科學者としての型の人で一度警咳に接する人は皆「學者肌の人」といふ感がある。

であらう、私が先生に始めて會つたのは大正九年の二月雪尚深い杭ヶ原母校の宿直室であつた、一般の先生方とは趣が大部變つて居つて磊落な處に痛烈肺肝を貫くといふ處があり私も大分冷かされたものだ、丁度其時私は諸學を一生懸命にやつて居た、先生と宿直室に立て籠り、寄宿舎の路の飯を食つてそのまゝに閉口して居たものだつた、朝寢癖の私がいづまでもねて居ると幽に雨垂れの音の様にコトコトといふ音がきこえて居る、然も枕元で先生が獨逸語の原書を讀まれて居る聲であつた、先生もかなり寝る事が好きと見えて一日中ねて居られる事がありまるで寝る競争といふ〇觀があつた事もあつた、それから丁度その頃先生は魚に附着するデストマの研究をされて居つて毎日魚や昆虫の臭いのが部屋の中に充滿して異臭鼻をつくのは流石無精の私も閉口したものだ、時折はアルコールに水を入れて酒の代りに舌つゞみを打つた事もあり、豆腐を糞でしばつて町から買つて來て食つたのも昨日の様に感ずる、春夏秋冬一枚服一帽子には私も一寸吃驚した、先生は情に厚い人で確か俸給をさいて令弟を教育されて居られる様だつた、御兄弟十三人あつて長男が先生だから一といふのださうだ、それから二郎三郎とあつて一番末の子が十三子(トミコ)といふのださうな先生は岩句様の人で運動は劍道をよくし又雄辯の人である、又先生は大の皮肉屋で私が法學

を一生懸命やつて居るにそばに來て「Y君君そんなに法學を勉強して何になるか一體僕の様な生物研究者から見ると法學者の意志が博度し兼ねる型法には犯罪に對し裁判官が型罪を加へる事になつて居るが一體生物に對し生物が何の權威を以つて型罪を加へる事が出来るか、人生なんていふものは生物學を研究し之を基礎としなければ到底わかるものではない、そんな土臺のない學問は止めたまへ」といふ様な筆法、

私は知らないが先生の講義には心切と熱どがあつて好評噴々たるものだつた、點數は甘い方だ、

母校としては惜しい人を失つたものだが先生の榮進の爲めには止むを得ない、折角御自愛遊ばされん事を祈る他日の御大成を鶴首して待つ (一一、一一、一八)

反 動 鈴木生

こ、はいや高き塔の三層  
硬き石もて堅固に固めたる牢獄の三層。  
身体の自由をひさぎ來る日も來るも  
生活のためにあわざつ、  
なほこ、に筆をとる我は無産者。  
うみたる時 疲れたる時  
苦しき時 悲しき時 か、る時。  
冷く厚き石壁に わづかに穿ちし  
一つの窓は 我に興へし

唯一の自由 唯一のなぐさめ。

雨降れば曇り 日照れば透る

穿たれし南の窓は この牢獄と

自由の國をへだつる境 永遠の扉。

うみたる時 疲れたる時

苦しき時 かなしき時

しひたげられし無産者は。

か、る時我は この窓にこの扉に

立ちつくし 唯一人自由の國を享樂す。

今そこは夏の太陽に輝き

さながらに降注ぐ光の中に

浮び出でたる永遠の樂園。

海の彼方 に白く輝くは 日照り雲

こなたに輝くは 薨の波

灰色の電柱 その電線

赤煉瓦の角煙突 黒線電信の柱

船の帆柱

これらをつすむる如き 黒づみし松と

匂ふなる若き緑

お、

彼等の國は如何に輝くことよ

それ自ら光を發する如く。

海に浮ぶは白帆

小蒸氣よりは煙ゆら／＼と

にじみ入る如く水色の空に

やがてどけうす。

窓の外 扉の彼方 自由の國は

ざんざんと 降り注ぐ光の中に

明るく いと明るく

かくも明るく 永遠に輝く

權威の如く筆を動し

うみ疲れし 我は今 魂のみ

自由の國にさまよう

お、自由の國 か、る時慰藉の國。

か、る時 お、翼あらば (お、金あら

ば)

どび出して……

といふ衝動にからる、は

身体の自由をひさぐ我

味氣なき筆を 生活の爲に動かし

うみ疲れ苦しと思ふ

私の反動 お、私の反動。

されど牢獄の三層

石に穿ちし南の窓は

冷く固く 自由の國と牢獄の境

永遠の扉 お、永遠の扉。

たゞ出でんたゞのがれん

壓迫の反動に

かくも強く か、る衝動に捉はる、

無産者は 我は

依然生活の爲に

扉の内に筆を動かす

こ、はいや高き牢獄の三層

硬き石もて堅固に固めたる

牢獄の三層

(終)

秋季弓術大會の記 雅人生

秋も盛り過ぎてグラウンドに落葉の錦を敷き  
金風も今はうら寒い木枯と交へて運動會以  
後吾等の土氣漸く衰ふ……

此處に我弓術部は秋季大會を催はし沈滞せ  
る土氣を奮起せんものとの意氣込みである  
採點は二尺(十點) 一、五尺(二十點) 一  
尺(三十點) 八寸(四十點) 銀的(五十點)  
金的(百點)とし先づ

豫選を行ふ二尺のだから落ちた者も二四名  
ばかり順次豫定の如く進行し八寸の後には  
餘興として果物鳥を落す事とし人を問はず  
有志者に弾がしめた三十分位に大方は落と  
されたその後

銀的金的を行ふも残念ながら當つる者もな  
く終り暮れるに早い木曾はもう何時しか日  
は傾いた

入賞者の成績は

|    |      |    |       |
|----|------|----|-------|
| 一等 | 二〇〇點 | 三年 | 佐藤鎮安  |
| 二等 | 一一〇點 | 三年 | 田中稻實  |
| 三等 | 一〇〇點 | 二年 | 大内隆   |
| 四等 | 九〇點  |    | 小橋先生  |
| 五等 | 八〇點  | 一年 | 野村高次  |
| 六等 | 八〇點  | 三年 | 櫻井榮一  |
| 七等 | 七〇點  | 三年 | 安部達三郎 |
| 八等 | 六〇點  | 二年 | 吉田邦男  |
| 九等 | 六〇點  | 一年 | 山上壽正  |
| 十等 | 四〇點  |    | 増田先生  |

因に参加者は一昨年来増加し本年度は五

十名位となり従つて當的の歩合も良好となつた様である  
この日西澤先生の中張都合に由り参加のなかつたのは残念であつた  
然し盛んに初まり壯に終つたのは感謝する次第である

■彙 報

△山口教諭來任  
埼玉縣立秩父農林學校教諭山口正造先生は十二月五日附本校教諭兼舎監に轉任を命ぜられ十二月十日附着任遊ばされた、大正五年札幌農科大學林學科御卒業、當分菊地前教諭の受持たりし三角、動、植物御擔任  
△第二學期試験  
十二月十八日より全月二十二日まで  
△冬季休業  
十二月二十五日より翌年一月十五日まで  
△校誌摘要  
十二月四日 月 曇  
和歌山縣東牟婁郡七川尋常高等小學校校長栗木長四郎氏來校參觀西澤先生に就き林業補習教育に關しての意見聴取  
五日 火 雪  
積雪三寸に及び強風  
七日 木 曇  
校長本月より向三日間出縣、實業補習教育問題に就いての協議會  
十日 日 晴後曇

教室のダンロ据附  
十一日 月 曇  
雪らつき寒さきびし、教室ストーブ焚き初め  
十五日 金 雪天  
山口教諭着任、新任式、歡迎茶話會

△會員消息

木下武夫君(一五) 北海道廳就職地方費  
森林名寄事務所在勤被命天蘆國上方住居  
川郡名寄町一條三丁目増田佐平氏  
木下 旭君(一八) 一年志願兵終末試験に及ぶ豫備見習士官として來春三月まで甲種勤務演習に服務新潟縣村松町歩兵三十聯隊七中隊附被命  
日野櫻亮君(一五) 札幌市北大通西八丁目井山顯親氏方へ轉居  
山下 尚君(一八) 樺太大泊町王子製紙株式會社樺太分社山林課勤務  
北村 巧君(一七) 舊姓、米倉今回改姓廣瀬運平君(一五) 一年志願兵終末試験に及ぶ豫備役甲種勤務演習に服務新發田歩兵十六聯隊十一中隊附見習士官被命  
柳澤虎三君(一八) 松本歩兵五十聯隊七中隊一年志願兵班に入營  
大家孝三君(一七) 舊姓紺田を改姓、岐阜縣吉城郡船津町今町に居住  
遠山虎雄君(一七) 帝林局上松出張所勤

務中の處九月末辭職三重縣阿蘇郡神戶町本多町に居住製絲業經營  
武居喜太郎君(一四) 愛知縣東加茂郡足助町久井戸秋田木材株式會社足助荷扱所内へ轉居  
伊藤三男君(一八) 豊橋野砲兵二十一聯隊留守隊八中隊一年志願兵として入營  
新井榮太郎君(一七) 豊橋六十聯隊第五中隊へ入營  
小橋先生 千葉鐵道第一聯隊八中隊一年志願兵として入營

△秋季運動會(廿二回)收支決算書  
收入之部  
金百圓也 大正十一年度校友會費支出  
金六拾圓也 前年度運動會殘金支出  
支出之部  
金百六拾圓也 實支出合計額別表の通り  
過不足なし

○各部支出一覽表

| 部 名  | 支 出 額  | 豫 算 額  |
|------|--------|--------|
| 庶 務  | 一五、五四〇 | 一八、〇〇〇 |
| 賞 品  | 二二、〇〇〇 | 二二、〇〇〇 |
| 裝 飾  | 一六、八二〇 | 二〇、〇〇〇 |
| 餘 興  | 二一、五五〇 | 二二、〇〇〇 |
| 賣店風紀 | 九、九六〇  | 一〇、〇〇〇 |
|      | 四、〇〇〇  | 三、〇〇〇  |

音 樂 七、〇〇〇  
借 物 八、〇〇〇  
接 待 五五、一三〇  
計 一六〇、〇〇〇 一六〇、〇〇〇  
○當日寄附金收支報告書  
一金百貳拾九圓也 當日寄附金計  
丙支出  
金貳拾參圓五拾錢  
寄附者當日接待費  
金拾貳圓八拾錢也  
樂器破損修繕代  
差引殘額  
金九拾貳圓七拾錢也 翌年度へ繰越  
以上

△縣下實業學校聯合マッチ得點 (本校)  
一トラック決勝 得點なし  
一フィールド決勝 全上  
一柔道試合 十點 (三位)  
一劍道試合 二十點 (一位)  
一高點試合 柔道 なし  
劍道 一等七本拔 本校安江  
一弓術 十八點 (二位)  
一庭球 四等 本校樋口、加藤  
追而劍道高點の安江君に對し賞與送附あり

△諸金領收報告  
一林友代 中村五郎君  
一金貳圓也 武居喜太郎君  
一金壹圓五拾錢

△記念會贈金  
一金五圓也 長崎信一君  
一金五圓也 百瀬三三君  
一金參圓五拾錢也 矢島 稷君  
一金拾圓也 古根 是君  
一金八圓也 原川只一君  
計金參拾壹圓五拾錢也  
累計金貳千貳百五拾四圓五拾錢也  
△塚越先生謝恩金  
一金貳圓也 池主銀治君  
累計金參拾五圓五拾錢也

編輯 雜 記

△こんねんは今年はどて暮れにけり、と昔の愚な人の歌つた心がやはり今の自分の心である、新しき年の始めに希望と期待とを以て歩み出した者が、その中にしつかりしやう、明日からでもやらうなど、思ひながら其時の場當りや賞讃を受けることに夢中になつて居る間に、人の注意の中心から離れないやうに、又なるべく認められないやうな仕事や、こころさい雑務や、自分がしなければ他の何人かやつてくれる仕事などを勉めて避けて一生懸命に自分の利益、自分のみの責任を負ふべき事に熱中しなるといふあけ足をとられないやうに地位の安定であるやうに攻撃や陰口をされないやうにど一意所謂成功の途を辿つて居る間に年の暮が來て了ふのだ「駒隙を過ぐ」と思は

す感歎せざるを得ない、掻き集め掻きあつめたものが果して何であつたらうか今は何が残つて居るであらうか、願する事はやめよ?  
つまらない不平や愚痴や人を陥れた言葉や出過ぎた行びが今も鮮かに後味となつて残る許りだ、よし賞讃された事があつたとしても果して今から考へると良心が認許する事であらうか、よし良心も之を認許する程良い事であつたとしても過ぎ去つた事では仕方がない、昨日の御馳走があつた事は今日と明日との御馳走ある事を決して保證しないからだ、寧ろ少し許りの苦みや人にかくれた心盡しがどの位今の自分を安らかに清らかにそして力付けてくれるかわからぬ、併し何事も凡ては過去の事だより返らぬがい、未來が自分の行手であり希望が現在の沈滞を妨げるのだ、黑白もしらぬ童兒すら熊や牛と違ふのは彼に花やかな希望があるからではないか況して人生の深い味を味ひこ、あるものが希望なくしては一刻もたり得ない譯なのだ、現在の失敗と不満に對して未來の輝かしい希望ある處に人生の妙は存する、唯古い官吏や教育者や其他の人々が徒らに過去の甘い追想に耽り彼に備へられし將來の希望を思はず、傾きかけ己れの地位を死守せすば滅びて了ふ様に思つて居るのは餘りに退嬰的といはなければならぬ、過去を顧る勿れ、前途をのぞめ前途に對しては如何なる老爺も無經驗であ

る、未來を仰ぐ時は總ての人が青だ、過去を忘れよ逝きたる年を數ふる勿れ、忘年会を行へ新しき年の準備としては凡てのいまはしい記憶を忘れざるのが第一ではないか、無條件を以て白紙を以て新しき年の首頭に立たう、人が何といつてもかまはない凡ての責任を茲に自ら解除するのだ荷重となつて居た舊責任は之を追窮するものに委託する、君も僕も身一つになつて軽々と勝つべき戦の門出を祝はう

△十一月號には附録として會員名簿を附した案の定氣持の悪いやうなものであつた殊に發行日後れ申譯もないお待ち兼ねの諸君には期待にもそむいたらう、唯なげやりの非才を抱いて謝す許りである、若し征矢三郎君の周密なる努力がなかつたならば或ひは出来なかつたかも知れない、尤も發行遅延は主に印刷所の都合であつた、多分の號も延いてをくれる事と思ふが一生懸命急いで居る處である何卒御諒察を願ひ度い△本誌の改革案の根本的なるものに就いて校内に説あり新年號に廣告として出す事となるであらう第一に經濟關係である、そして略々職員間では纏つたのである、又編輯者には別に編輯形式上の意匠ありまして都合な事とも思はぬからやつて見度いと思つて居るそれは版を菊版として雑誌風に綴

ち表紙をつけるのだ、合理的の反對説のない限り實行したいと思ふ、勿論經費は豫算の内に於てである

△編輯とか編輯記をかくとかいふ事は目立つ事ではあるが大して辛いことではない、第一には發送の事が一番辛いと思ふが多勢でやるから出来る、尤も十一月號は時宛かも第二學期の試験最中で生徒は馬鹿に勉強するから(常にといふ譯ではない)發送などといふ何日か、ることに従事せしめ。事が出来ない、それで事務の人や小使室の人や庶務の人が合同して半日で全部發送して仕舞つた、實に大騒ぎであつたこの十二月號がもし休暇中にも印刷所から送らる、様な事になれば去年の様に福島在住の生徒に特別の委託をなすかどうかしなければならぬ、今から困つて居る

△第二に仲々重大な仕事は發送簿の整理である、之は又卒業生一覽簿とも稱すべく一見卒業生の住所勤先を知る事が出来之を離れて消息を知る事が出来ない、實に重要な物である、之の整理を全するべく謹嚴と静肅なる人を要する、エーモアではない事實である、少くとも相當の煩雜なる仕事である、この二つが揃つたならば發送機關と整理機關易々として之を經營する事が出来ると思ふ

△近來卒業生諸君の母校及林友に對する注意覺醒し來り實に喜ばしい卒業生の眼より見たる時は確かに卒業學校は母校である

其中に於ける舊師は云はすも哉寧ろ弓ひける矢場、樂書したる廊下の隅、詩集をひろげて蔭に憩へる誰も氣のつかぬであらう一本の灌木、實習した苗圃や測量した校外の田畝の畔など忘れ難いものであると思ふ。即ち卒業生と母校との間は精神的關係を以て最も深きものとしなければならぬと思ふ、精神的關係なくして物質的の關係を持続せんとするが如きは既に誤れる事ではあるまいかと思ふ、先づ第一に親しき精神的關係である然る後に其援助と物質的關係である、そして在校當事者としては凡ての外部の援助を期待せず一己の力を以て校務に當らなければならぬ思ふ

△年の終、凡ての事を深く謝する、校友諸君の健闘年改まると共に愈々盛ならん事を

Y S 生



大正十一年十二月廿三印刷  
大正十一年十二月廿五發行

長野縣西筑摩郡島町四番地  
編輯兼發行人 安井正夫  
長野縣松本市小柳町八番地  
印刷所 淺川吉藏  
長野縣松本市小柳町八番地  
印刷所 淺川吉藏  
長野縣西筑摩郡島町八番地  
發行所 蘆澤書店

【定價金參錢】